

シベリアに逝きにし慰霊の碑を囲み白髪の遺児献花しており

凍土の墓標

東京都 金井秀雄

【執筆者の紹介】

執筆者は愛媛県東予市出身。

終戦当時、満州国平房の航空隊におり公主嶺、奉天を経て二十年八月末入ソする。重労働約二カ年、昭和二十二年六月無事復員して四国電力の社員となり、停年まで各営業所などに勤務する。

愛媛県のシベリア抑留慰霊碑の建立に際しては多額の寄付を賜り、現在地の高松市より（百六十キロ）、毎年五月の慰霊祭、総会と懇親会などに必ず出席している。

（愛媛県 山本 繁夫）

「入隊まで」

私は大正十（一九二一）年六月、上州高崎で生まれた。

当時高崎は商業都市であり、軍都でもあった。小学校は駅に程近い高崎南小学校であった。昭和六（一九三一）年満州事変が起こってから、高崎歩兵十五連隊の勇士が戦地に行く時もまた還る時も、先生に引率されて駅前通りに整列し、日の丸の小旗を振り万歳万歳と叫び送り迎えをした。子供心に、鬚面の凱旋兵士を迎える時は嬉しくて心もはずんだが、戦地に向う兵士を送る時は何か胸迫るものを感じた。出征部隊は連隊大手門を出ると、真っ直ぐ駅に向わず、郷土へのお別れの意味が大きく北に迂回、市内を行進してから駅に向った。潮風から守るためか全員、小銃を真っ白い包

帯で包んでいた。日常、兵士の行進は見馴れていたが、真剣な表情で正面を凝視する小銃の列には、それをおし包むような緊迫した空気がみなぎり、小旗を振る万歳の声に時に涙ぐむことがあった。

ある時、おじいさんが二階の屋根の上で、長い竿に日の丸の旗をつけ、夢中になって振っていた。私はそのおじいさんが屋根から落ちはせぬかと心配で、おじいさんを見上げては万歳を叫んだ。きつと息子さんが白い小銃の列にいるのであるうと思つた。子供のころから出征兵士を送り迎えしていた私は、昭和十六年の春、私自身が徴兵検査を受ける事になった。

本籍が高崎から東京へ移っていたので、現在の東大竜岡門の脇にある関東電工の所が当時本郷区役所で、そこが検査場であった。全員、越中ふんどし一つになり、矢印の順に身長、体重、胸囲、視力、聴力、手足の運動と進んでゆく。その場所、場所所で不動の姿勢をとり、大声で番号と氏名を叫ぶ。姿勢が悪かったり声が小さいと、縮み上るよ

うな大声で注意される。最後に肛門と性病の検査をして終る。私は痩せていたので甲種合格は無理だった。第一乙種から現役兵なので、是非第一乙種にと神に念じた。甲種は身長一・五二メートル以上の身体強健なる者、胸囲は身長二分の一以上との規定であった。私は身長一・六〇メートルだが胸囲は七五センチで身長半分に達しなかった。兵科の希望は三つ書けた。私は第一希望も第二、第三も「歩兵」と書いた。衣服を正し、徴兵検査官に呼ばれるのを待った。その待つ間も、心の中で、第一乙、第一乙と呪文のように唱えていた。私の名前が呼ばれた。検査官の前にて不動の姿勢をとり、番号と氏名を叫ぶ。検査官は大佐で温和な表情の方であった。緊張の一瞬が流れ、私は第一乙種合格、衛生兵と宣告された。衛生兵にがっかりした。そのころ「一にヨーチン二にラッパ」といい、衛生兵は楽な兵科といわれた。しかし後年、衛生兵なるがゆえの恩恵を受ける身となるが、その時はまだ分からない。ただ、現役兵と

して国防の第一線に立てるといふ感激と喜びで目頭が熱くなった。当時、木綿の代用品としてステールファイバーという生地が出回っていた。木綿に比べ耐久力が弱く、肌ざわり悪く、着てもダラツとしてしまりが無い。一般にスフと呼ばれていた。私が現役兵として入隊すると喜んで告げた時、いよいよ日本陸軍にもスフが入るのかと、かかわれた。

入隊は昭和十七年一月八日であったが、その一月前の十二月八日、真珠湾攻撃が行われ、米英両国と戦端が開かれた。数日後の朝日新聞に、高村光太郎さんの「美しき涙」と題する詩がのせられた。

隠忍自重、耐えに耐えた我が国がついに米英両国と戦端を開くに至った。大臣も農民も学生も、涙してこのニュースを聞いた。

愛する祖国を守るために敢然と立って銃を執ろう

おおよそ、このような意味の詩であった。私は

いたくこの詩に感激した。国中が開戦に沸き立ち、街頭ラジオの前は黒山となり、勇ましい軍艦マーチが流れた。入隊も間近い、お国のためにお役に立つ日も近いと、召される日を待った。私は四人兄弟の末っ子で、兄も姉も東京に行き、私だけが親元に残っていたので母に可愛がられた。入隊の日が決まると、なんとなく整理や準備するものがあり、落ちつかぬ日が続いた。父はすでに亡く、母といかにあつきり気軽に別れるかに腐心した。満州事変のころと違い。この度の戦は国運を賭しての戦争である。一たび戦場に臨めば生還は期し難い。ここ数カ月が母と私の死別生別を兼ねたお別れの期間であると思った。

高崎の幼な友達、横田さんの二階を借り、十月から十一月、母と私の二人だけの生活が始まった。母は私の好きな物をよく作り、私はおいしい、おいしいと無邪気に食べた。二人で伊香保温泉に行ったが母は口数が少なかった。高崎にいる間、毎朝四時ごろ、高崎公園の滝に打たれた。同じ愛国

心に燃えながら流れ弾や輸送船にて死ぬ人と、また任務を果して戦死する人がある。私は前者の死を恐れ、水行の都度「よき死に場所をお与え下さい」と神に祈った。一月八日、晴、風もなく穏やか、防諜の關係で派手な出征風景は禁じられた。

仏壇に向い、母の余生安樂を念じていた時、母が小声で「私はここで送るね、元気で」と言った。

私は小さくうなづき「では征くね、元気でね」と最短の言葉で明るく返事した。視線は合わせず、長い言葉は禁物と黙っていた。町会の方々に挨拶し、本郷の町並みも見納めかと振り返ったが、母の姿はなかった。あのまま仏壇の前に座っていると思った。私は兄や姉と集合場所の東京駅に向った。

「終戦まで」

私共は東京駅より広島に集合、軍装の支給を受け、宇品港より輸送船にて釜山に上陸、鐵路満州に向う。新京（長春）独立守備隊にて三カ月、厳しい戦闘訓練を受けて、公主嶺陸軍病院勤務とな

る。衛生部員としての教育を受け軍務に服す。その間、戦局は次第に厳しくなり、昭和十九年、サイパン、グアムの守備隊が玉砕する。兵員も武器、弾薬も次第に補給困難となる。

当時、虎の子といわれた関東軍（満州）の精銳を、その持てる武器、弾薬と共に南方戦線に転用した。これは昭和十九年二月に発せられた阿号作戦だった。手薄になった人員の大穴は、満州在住者のいわゆる現地召集で埋めることになった、しかし既に若い人が少なく、体力の劣る者が多い上に、武器の補充も全く不十分であった。虎の子は今や張子の虎と化した感があった。昭和二十年になると、同盟国ドイツの敗戦は確定的となった。

これが終焉すれば、ソ連が満州に侵入することは間違いないと判断した軍部は、その主要侵入路の要害の地に陣地を築いて迎え撃つべく、それぞれ近くの駐屯部隊の主力を投入して陣地構築に従事せしめた。また大きな損害を被っては作戦上困ると判断される部隊、例えば航空隊は戦線となるで

あろう地域から内陸部へと移駐させた。これは隠密裏に昭和二十年五月中旬から開始された。そのころ私は公主嶺陸軍病院にて衛生兵教育を担当し、衛生軍曹であった。昭和二十年二月、関東軍に入隊する初年兵の身体検査のため福岡陸軍病院に出張、同二月中旬、ソ満国境に近い富錦飛行場大隊に転属。六月二十日より七月二十五日の間、航空軍隷下の衛生下士官候補者の教育を命ぜられてハルピン陸軍病院に派遣される。その教育期間中に原隊は富錦より延吉飛行場に移駐する。激動する戦局と共に私も慌しい移動が続いた。延吉飛行場に復帰して間もない八月八日未明、ソ連軍は突如として国境を突破。国境守備隊は寡兵よく善戦するも制空権なく、重火器なく各所に敗れて、ソ連軍は怒涛の勢いで侵入して来た。ソ連の飛行機は何回となく上空に飛来するが、それを迎え撃つ友軍機の影はない。

私達は飛行場に近い山腹につくられた洞窟陣地に移る。九日、富錦飛行場全面激戦中のニュース

を聞く。数カ月を過ぎた富錦の薄暗い半地下壕の兵舎やトーチカ陣地の姿が脳裏を走る、もし移動がなかったら今ごろは激戦のさなかにいたことであろう。そのころ、私の本隊は、朝鮮国境の通化を中心とする防御陣地にて抗戦するため撤退する。私は木村大尉以下六十人と共に、ソ連軍を攻撃するために飛来する特攻機に給油後、本隊を追及するよう命ぜられていた。しかしいくら待てど友軍機は現れず、連絡も絶えた。十五日、終戦の玉音放送を聞くが、雑音がひどく真偽のほどが分からず、ソ連の謀略説も流れた。延吉は抗日思想の特に激しい所であった。その夜から暴動が起き、大勢の在留邦人が難を避け、飛行場周辺に逃げて来た。八月十七日、駐屯地司令部より、ソ連軍が進駐して来るから抵抗せず武装解除を受けるよう通知があった。私達は本隊に合流して抗戦することに決め、その夜八台の車に分乗、暗夜ライトを消し飛行場を脱出する。沿道に避難していた民間の人々が、私も連れて行つてとトラックにすがる。

助けたい心と軍律との板ばさみ。兵は誰しも無言だった。必死にすがりながら「お願いだから連れて行って」から、やがて「私達を置いて逃げるの」の恨み言葉となり、ついに力尽きて手が離れる。私達は闘うために行くのですから許して下さいと心で詫げる。あの人達は無事日本に帰れたらうか、今もあの時の情景は心の傷跡として残っている。やがて市街を抜け軍用道路をひた走る。軍人官舎、日本人商店は破壊され、略奪の跡も生々しい。あゝ満人部落に入ると、赤旗を掲げ大勢の満人が出迎える。日本軍と知るとまた家の中に戻る。尋ねると、ソ連軍が来るから赤旗で出迎えるように命令があった由。ソ連軍もこの道を南下しているらしい。野に寝、山に伏し本隊を追う。森林の中を通過する時、二、三歳の日本人の子供が十人ほど、帯端を木に結びつけられ、手に玩具を握り、親の跡を追うような姿で死んでいた。ここを通った避難民の母親が力尽き、集団よりの落伍を恐れ涙のみ愛児を置いて逃げたのであろう。

この時、敗戦のみじめさを肌で感じた。高い山を越え安図の部落に着く。満軍は城門を閉ざし、通るなら武力で通れ、その時は城内の日本人は皆殺しだと言う。やむなく今越えてきた山をまた登る。途中より敦化への道をたどる。次の日の夕刻、高い塀に囲まれた敦化パルプ工場社宅に入る。このパルプ工場は、治安の最も悪い昭和十二年に建設された。社の敷地は約二万坪、周囲を囲む当時は、働き盛りの若い男性はほとんど軍に召集され、婦人の他は老人と子供のみであった。その夜私達は大変歓迎され、各家庭に分宿する。私の泊った家はご主人は召集され、秋田出身の奥さんと女学生に老女の三人暮らしであった。久方ぶりにお風呂に入り、手元少い材料の中から心こもるものなしを受けた。老母は「戦って兵隊さんの弾丸運びして死んだ方が良かった」と敗戦後の惨めさを嘆いた。

翌早朝目覚めると、すでにソ連軍戦車隊に包囲されており、軍使により終戦が告げられ、飛行場

にて武装解除を受ける。飛行場にはすでに数万の日本兵が収容されていた。パルプ工場はその後、男子は一人もいなくなり、夜ごとソ連兵が集団で乱暴しに襲ってくる。今まで外敵を防いだ高い塀は、逃げる道を塞ぐことになった。若い日本女性は、三十余人が青酸カリを飲み集団自殺し、カミソリで自決された婦人もいた。私がお世話になった奥様も娘さんも自決されたことを後日知った。

私達は日本に帰るための移動との説明を受け、千人宛の梯段を編成、牡丹江の掖河に向け行軍する。一日四十キロ、野宿を重ねての強行軍であった。武装したソ連兵に監視され蟻のように行軍する。隊伍より遅れたり離れると「ダワイ・ダワイ」と連呼して追い立てられる。途中、我々と逆に南下する避難民ともすれ違う、ほとんどが婦人、子供、老人。着の身着のまま、やつれた姿で、汗と泥にまみれた集団だった。軍隊を信じて渡満した人々かと思うと申し訳なく、また哀れであった。日本の娘さんが髪も乱れたまま、死んだように満

人の荷車に乗せられて行く。助けることもできぬ我々も情けなかった。戦いに敗れた国民は惨めなものであった。

掖河では毎日、戦利品としてソ連に送る貨車積み作業をする。食料、薬品、家具、カーテン、こわれた自転車、こんな物と思う物まで運び去り、最後には引込線のレールまでも外して持ち去る。その食欲さはすさまじいものであった。ソ連に向うおびたしい貨物列車の間を縫って、日本兵は千人単位で貨車に乗り、日本へと喜んで出発する。私達は、早く順番が来ぬかと羨望の目で見送っていた。

「シベリアにて」

十一月四日、待望の貨車が来た。東満の山野はすでに冬であった。東京ダモイ（東京に帰る）、ソ連将校の説明後、嬉々として貨車に乗り込む、十四トン貨車の両側を二段に仕切り、中央にストーブ、朝顔型のトイレ、小窓が上段に一個、四十人が乗り込む。狭くても日本に帰れる嬉しさで不平

もない。貨車が動き出すと、嬉しさのあまり各車両から万歳の声が起こった。車内は国に帰れる喜びで、お国自慢や食べ物の話、歌も飛び出し、陽気で活気に満ちていた。外より鍵のかかった列車は北へ北へと走る。国境を通過する。これよりシベリア鉄道へ入り、東のウラジオ方面に行くと思っていた。夜が明ける。小窓からのぞくと列車は西へ西へと雪の野原をひた走っている。「東京ダモイ」は逃亡を防ぐ謀略だった。小説で読んだシベリア囚人の哀話が胸をよぎる。車内は昨日までの陽気さとうって変わり、誰も口を開く者もなく、暗い沈黙が続く。列車は車内の変化に関係なく、白一色の大地が果てしなく広がるシベリアの荒野を走り続ける。やがて丸一日バイカル湖畔に沿って走り、イルクーツクを過ぎ、第二シベリア鉄道の分岐点タイセットより支線に入る。満州を発つて十三日目、タイセット四十五キロ地点第五收容所に着いた。狭い車内にうずくまり食事と水の補給のため停車するぐらいだったので、車外の冷た

い空気はおいしかった。收容所入口で荷物検査を受ける。今までも何回となく銃を突きつけ所持品検査し、時計、万年筆等を奪われている。少なくなった荷物の中から欲しい物を取り出し、役得のように奪ってゆく。この收容所は最近までドイツ兵の捕虜を收容していた所であった。幕舎内は、蚕棚のように二段に仕切られ、中央にストーブがある。電灯はなく、夜ストーブを真赤になるほど燃やしても、煙突から遠い四隅は天幕から氷柱が下っていた。旅の疲れをいやす間もなく、翌日から作業に追いまくられる。この收容所での仕事は、森林での伐採が主力作業であった。それに伴い材木運搬の馬方、材木集積作業、薪作り、製材所への材木運搬、自動車の道路作り、森林鉄道工事、抑留者とロシア人の宿舍作り等に分かれた。伐採は極めて危険な作業であった。冬季は凍結してヤニが出ないので、のこぎりが使い易いため、冬の主作業であった。疲れた身で喘ぎ喘ぎ雪の山道を登り、何百年の間、寒さに耐え育った唐松、赤松、

白樺、樅等の大木を二人一組となり、長い二人挽きのピラー（鋸）で高さ二十メートル以上の直立した大樹を伐る。作業前に指揮者より注意がある。

一 枝ぶり、地形、風向き、障害物の有無を見定めて倒す方向を決める。

二 根元より雪を取り除き退避路をつくる。

三 倒れる側にピラーで直径の四分の一以上の切込みを作り、斧で削り倒れやすくする。

四 倒れる気配が起きたら二メートル以上離れる。

等であったが、疲れている兵はなかなか守りきれず、経験がないこともあり、事故の原因ともなった。倒す方向も決まり、斧を振りおろしても、腰がふらつき斧がはね返ってくる。切込みが深いほど危険が少ないのだが、空腹で斧を振るのはこたえる作業であった。切込みが済むと、反対側より二人でピラーを挽く。三十分もすると息が切れ、腕がなえる。一息入れてまた挽く。吐く息に鬚もまつ毛も白く凍る。やがて虚空を衝く亭々たる大

樹は、大きな軋みをたてて傾き、次第に速度を増し一大轟音をたてて大地に叩きつけられる。大砲を打ち込んだような振動が原生林に響き渡り、枝が砕け散り、雪煙りが高く上る。思わぬ方角に倒れて圧死する者、飛び散る枝に頭を打たれ即死する者、耳まで覆う防寒帽のうえに足場も悪く、動作にもぶり、不馴れもあつて、当初痛ましい事故は毎日のようにあつた。一本の大樹を倒すと太い枝を挽き落とし、細枝を斧で切り払い、ロシア人監督の指示で長さ五メートルの丸太に切り、寒さに耐え、飢えと闘いながらまた次の伐採にかかる。

食事は一日、黒パン三五〇グラム、昼、水のようなスープを飯盒に三分の一。夜、お粥、飯盒に三分の一とひどいものであつた。そのお粥も満州より運んだ白米、麦、粟はロシア人に、私共は高粱が主で、他に燕麦、稗、大豆粉のお粥であつた。

労働と空腹の他に日本人を苦しめたのは南京虫と虱であつた。南京虫は人が横になるとにおいを嗅ぎつけ、丸太の割れ目から、ぼとり、ぼとりと

音をたて落ちてくる。首筋、足首にいたる所から侵入してくる。防ぎようがない。疲れた身体は南京虫に食われ放題、痒さで安眠できず、潰瘍となり苦しむ者もいた。半年後、木造宿舎に移り、幕舎をこわした時、毎夜日本兵を苦しめ血を吸って赤黒くなった南京虫が天幕の中央部に集まり、直系二メートルほどの大きさの円状となり、下の布地が見えぬほどに重なり合っていた。虱の発生にも悩まされた。発疹チフスの原因ともなるので、駆除には真剣だった。包帯交換の時、手で触れぬほどに虱が密集してゐる者もいた。死亡する直前、体温が次第に低下し手足が冷たくなると、まだ微かに鼓動する心臓の上に集まつてきて、お椀の蓋を伏せたように円陣をつくる。完全に息を引き取ると、また次の獲物を狙つて虱は列をなし死体より離れてゆく。下着はいたるところを虱に占領され、縫い合わせの所は、卵の巣となった。十日に一度ぐらい、入浴できるようにする。入浴といつても手桶一杯のお湯をもらい、身体全体を洗う。

湯船等ない。その時、陰部と脇の下の毛を剃り取り、衣服は高熱で消毒する。虱駆除に大変効果があつた。

重労働と飢えと南京虫、虱の大群に苦しむ私達を更に苦しめたのは、シベリアの暗くて長い冬である。太陽は一日に二、三時間しか出ない。朝真上に月を見て作業整列し、暗くなり月を背に帰つて来る。休憩中に焚火を囲み顔が焼けるようになってくても背中が凍るように寒い。零下三〇度以下になると、ペーチカより出る煙は含む湿気が瞬時に凍るので、油絵のような重たい色となる。いつまでも焚火を囲むわけにはいかない。作業には必ずノルマがあり、一定の量をせねば、一人のために全員の帰りが遅くなり、少ない食事が更に減食される。疲れきつて悲しい夢路をたどる時、その悲しみ苦しみに追い打ちをかけるように、貨車が着くと、夜中に貨車積み作業がある。満州の鉄道は日本より幅が広い広軌鉄道で、ロシアのは更に広い広々軌鉄道であつた。重戦車を運ぶ事のできる

その貨車に、八人一組ぐらいで薪を積み込む。生木で重く、五本も背負うとふらふらする。遅くなると薪積み場が段々遠くなるので、必死になって運ぶ。夜の臨時作業をしても夜食が出るわけでない。肩が痛み、身体は冷えきって眠れず、朝まで身を縮めて身の不運を悲しむ。やがて起床の合図。いつもの通りまた作業が繰り返される。入ソしての一、二年は、敗戦による絶望感に体力も気力も衰えて、死への道をたどる者が多かった。

昭和二十一年四月、山林鉄道の土盛り作業中のことだった。午後からみぞれが降り作業は難渋した。牧徳一中尉は、スコップにて二段、三段とはね上がる雨を含んだ土の量と作業人員を計算して一〇二パーセントになると判断して、「作業止め」の号令をかけた。すると監督のニキーチン中尉は顔色を変え「八五パーセントだ、作業を続ける」と食い下る。ニキーチンは計算せず、ただ作業を続けるのみ強要して帰さない。折りよく横浜に行ったことのあるブララーゴ上級将校が来、実測し

て一〇五パーセントあると証言してくれた。その間、日本兵は暗くなった作業現場のぬかるみに、雨に濡れながらスコップを杖に立っていた。

収容所に向い列を組み歩き出した時、日ごろからどんな苦勞に耐えても、一人でも多くの兵を日本に帰したいと決意していた牧中尉は、終戦の詔勅を奉唱し始めた。続く兵もそれに和した。堪え難きを堪え偲び難きを忍び、日本に帰るのだと励まし合いながら歩む兵に、無情の雨は涙と共にその頬を濡らした。その夜、ニキーチンは収容所長のグローモフ少佐に彼流の報告をしたため、牧中尉はカントーラ（事務所）に呼び出され、深夜まで厳しい叱責を受けた。その後も牧中尉は、日本兵を庇ったためにノルマの責任を追及され、罰として地下牢に三回入れられている。ある朝、不寝番についた佐藤君は、薪をくべ柱に寄りかかり眠ったように死んでいた。前日まで共に働いた仲だった。

入院するのにも迎えが来ず、休養室は七十人も

の患者が溜まり、衛生兵三人にて看護に当った。毎朝四時ごろから検温、大小便の世話、食事分配、傷の手当て、夜も十二時ごろまでの労働であった。それでも厳寒の外での重作業に比べれば幸運の方であった。飯盒を下げに行った時、飯盒を大切そうに抱え、手作りのスプーンを握ったままの姿で死んでいる友もいた。その後もスプーンを握り、力尽きて逝ける友は後を絶たなかった。ほとんどが栄養失調の患者であった。ある日、患者の吉田君に呼びとめられた。共に働いたことのある衛生兵である。看護にも特に注意していたが、日ごと衰弱がつる一方であった。この日、紙を工面して下さいと頼まれた。シベリアでは紙は貴重品であった。トイレで紙を使用する者はいない。作業命令も白樺の板に記入し、翌日はガラス片で削つてまた使用する。医務室には薬品の包装紙があるので白い部分を届けた。数日後、彼は私を呼んだ。急にやつれが増し、顔が老人じみて見えた。彼は大切にしまっておいたのであろう、一片の黒パン

を私に食べてくれと差し出す。私は少しでも食べれば元気になるからと、押し返した。彼は無言で、かすかに首を振った。お互いに何十人もの死者を扱った仲であった。慰める言葉もなく見つめる私に、先日渡した紙片を見せた。ふるえる字で「お母さん、こんな所で死んでゆくのを許して下さい。私の分まで幸福で」と書いてあった。最後の気力で認めたのである。私は万感胸に迫って、瞼に溜った涙が黒いパンの上に落ちた。死を覚悟して無念の心情を書いたのであろう。ほとんどの兵が無言で何も語らず、朽ち木のように倒れていった。その多くの心の叫びを代弁する言葉であった。

日本兵の死体は、衣類を全部剥ぎ、素裸で埋める。その穴掘りも難作業であった。鉄棒や円匙が強く土に当たると、金属が打ち合ったように火花が出る。焚火で凍土を温めては掘り、温めては掘るを繰り返す。遺体は五体く二十体と同じ穴に埋める。その丘に行く時、櫓の上に枯木を積むように五人も六人もの遺体を重ね、掛声をかけて丘を登

る。明日は我が身かも知れぬ。やせ衰えた兵が、昨日までの友の遺体を引いたり押し下したりして行くさまは、地獄絵図を地でゆく姿であった。将来のある有為な青年を次々と失ってゆき、名もない丘に悲しみの墓標は立ち並ぶ。ある時は吹雪舞う雪の中に、あるいはまた暮れゆく夕陽の残光の中に、恐らく肉親の訪れはないであろう凍土の丘に淋しく立っていた。

シベリアも四月になると厳しい冬はようやく後退し、陽の光りが暖かく白樺林の葉を透して降り、雪も解け黒い土があらわれ、緑一色となる。白樺の幹に斧でゴム液を取るように溝をつけ、透明の水がぼたぼたと落ちるのを飯盒に受け、煮つめると甘い汁となる。楽しい大切な飲物であった。場所により、うど、にらも密生しており、飢えた日本兵にとり天与の授かり物であった。

春の遅いシベリアは直ぐ初夏となる。太陽は冬とは逆に、真夜中に二時間ほど沈むだけで、それも白夜、しらしらと明るかった。春から夏にかけ、

冬將軍に代って抑留者を苦しめたのがダニと蚊とブヨであった。ダニは森の中において、皮膚に食い込み小豆大に腫れる。つまみ取るうとしても絶対に離れない。胴体が千切れても頭だけは食いこみ、メスで切り取るしかなかった。高熱を出す風土病の原因ともなった。蚊は藪蚊の大きめ、ブヨは日本のブヨより小さいが、共に吸血力は強い。特にブヨは、黒い風が吹いてくるように大集団で襲ってくる。脇から見ると、一人一人の人間は黒いブヨの影に包まれている。日本兵には、目の所だけ網になった覆面を渡される。手袋、襟首、袖口を草でゆわく。顔など食われると、眼が開かぬほど腫れる。食事は、焚火し煙の中に入り、哀れな境遇と煙にむせびながら食べた。シベリアの秋は短い。森林と共にシベリアには広大な面積を占めるツンドラは北方系渡り鳥の生息地で、水面が凍り始める秋の終わりごろから、毎日きれいな列をつくり、南の空に飛び去って行く。私達も羽根があったら日本の空に飛んで行きたい。淋しそうな鳴

き声に大空をふり仰ぎ、郷愁の念にかられながら悲しく見送ったものである。

そんな折、東京ダモイの噂が流れた。シベリアで冬を迎えなくても済む嬉しさから、二人の発狂者が出た。一人は、窓外の雪景色を指さして「旭川に着いた」と連呼し、狂喜して歩いた。他の一人は、水筒の水を祝い酒のように受け「お父さん、帰って来ました。お母さん、帰って来ました」を繰り返した。ダモイの噂はデマであったが、気が狂った友を笑う者はいなかった、誰しもが気が狂うほど日本が恋しかったから。しかし、こうして私達のはかない希望を打ち砕いて、厳しい冬はまた訪れる。毎日の作業の帰り、重い足取りの疲れた兵は、薪を背負い越冬の準備にかかる。三度目の冬を迎えるころは、病人はすでに日本に帰り、^{ふたひ}篩にかけられたように死亡者は少なくなつた。しかし食事は依然として悪く、作業も厳しかった。服装は段々とひどくなり、かつては北辺鎮護のいかめしさがあつた防寒帽は真黒に変色、防寒外

套も松ヤニでよごれ、焼け穴から綿がはみ出し、鈕は取れ、拾つた荒縄を腰に結び、飯盒と空き缶、岩塩の入つた布袋を下げる姿は乞食よりひどい服装であつた。補修する針も折れてなくなり、針金を拾つて五センチぐらいに切断、片端をヤスリでとがらせ、反対の片端を平たく叩き、中央に糸穴をあけて縫い針をつくる。補修する糸の補給はない。軍袴（ズボン）に付いている紐を丹念にほどき補修糸にしたり、古い車のタイヤからも苦心して糸を抜いたりした。なんとか生きてゆこう、抑留者は皆、明日に托す希望がない、私達を支えているのは、生きて日本に帰り着きたい、その気力だけだつた。

昭和二十一年春ごろから身体検査が行われるようになった。聴診器を使つたり脈を診るわけではない。裸にして尻の肉を引っ張るだけで等級を決める。体力のある者は弾力と艶があり、衰えると臀部がたるみ、空気の抜けた風船のようになる。一人何秒。犬猫より簡単に一級、二級、三級、才

一カと等級がつけられる。一級は重労働に従事する。私はいつも三級だった。オーカとなると、作業休みか室内作業、半病人のような者であった。民主運動は年ごとに盛んとなり、政治教育は作業の合間や夕食後に行われた。

反動（反ソ）分子

ある日、寮長と作業指揮者に集合命令があった。私も寮長をしており出席した。ソ連の所長グロームフ少佐より、日本兵は怪我人が多く作業能率が落ちる。どうして怪我人が多いかと問われた。皆黙っていたので私は「休息が少なく食事が悪い。」

日本兵は皆疲れて行動力と注意力が鈍り怪我人が多い」と答えた。所長はその意味を通訳から知らされると、怒りを表情に表わし「馬には休息が必要だが、捕虜は命ぜられるままに働くのが当然だ」と述べ、威圧的に私を起立させ、姓名を名乗らせ名前を手帳に書いた。西田通訳が、金井は衛生兵だからその立場からの発言だと弁解してくれたが、所長の怒りは消えなかった。確かに怪我人は多か

った。中には辛い作業を脱れ、片端でも生きて日本に帰りたいと、自ら斧で足を傷つけたり、手の指を落とした兵もいた。敗者には納得も権利もない。何が正しく何が人権か、決めるのは常に勝者であった。

五月一日メーデーの日、久しぶりに休みであった。夕食の時、寮で会食する。百二十人ぐらいたった。その時、皇室の弥栄と祖国の復興を祈念、戦病没者の冥福を祈り「海ゆかば」を合唱した。翌日、医務室にいると寮より迎えが来た。寮には政治部のアクチブ（活動分子）が全員集まっていた。当時、所内には「天皇制打倒」「民主日本の建設」「我らの祖国とソビエトを強化せよ」等のスローガンが大書してあり、演芸会にも軍歌は禁止、浪曲も義理人情を賛美するとの理由で禁じられていた。そんな折での寮での会食のやり方を、民主グループは強く糾弾した。いわゆるつるし上げである。「東京ダモイ」の切符は民主グループの手に握られていると信じられていた。ソ連政治部将校

の後ろ楯もあって、ほとんどの大衆は彼らの言う通りに動いた。アクチブは拳を振り上げ絶叫する。大衆は「同感」「その通り」と相槌をうつ。仲の良い友が助言したり庇ったりすると、助言者を反動として徹底的に攻撃される。「反動は白樺の肥料とせよ」が彼らの脅し文句であった。

今までに何回となくつるし上げに立ち会っていた私は、弁解は無駄であることを知っていたが、私は日本を出た時の気持ちで日本に帰りたいこと、ソ連で受けた政治教育の成果は日本の現実に触れてから判断して生き方を決めたいと言ったが、相手にされなかった。その折、大声で私を批判する人がいる。ふと見ると秋元君だった。彼は病弱で何かと相談相手となり、仲の良い兵だった。私と視線が合うと急に黙ったが、それが人間なのだ。なんとか生きて帰りたい、その思いが時の権力者に迎合する弱い人間の知恵だと思った。彼を憎む心も起らなかった。嵐のような批判を受けながら、人の心の中を垣間見た思いであった。幸い委員長

の土居君はかつての友であり、本質は温厚な人だったので、他のラーゲルのような激しい体罰的な批判攻撃はなかった。しかし、自己批判し、大衆を間違った方向に導いたことにより寮長を罷免され、翌日より山の作業に出された。他の人に迷惑がかからぬよう自分の力いっぱい働いて、三カ月もたつと足がむくみ、腰は痛み、衰弱してゆくのが自分でもわかった。そんな折、仲の良かった作業指揮者の石塚軍曹が誰もいない木陰で「金井君は疲れているからハラシヨラボーター（作業優秀者）に推薦しておいた」と告げられた。私は、このような状況にも変わらぬ友の情に深く感謝した。作業優秀者には食事の量も多く、一週間の休息が与えられる。翌週、私は名前を呼ばれその休息室に入った。この与えられた一週間に衰えた体力を快復せねばとその夜床に入ろうとすると、ロシアの政治部将校が来て「金井、おるか」と言う。返事をするに「金井はここで休んではいけない、明日から作業に行け」との命令。反ソ分子に休息は

必要ないというわけである。私をかばってくれた石塚君に迷惑がかからねばよいがと心配であった。日本人同士がお互いに助け合うべき境遇にありながら、小さな収容所にも権力闘争があり、政権交代劇もあった。日本人の中に一片のパンのために密告者もあり、前歴者という、元諜報、特務機関、外交官、憲兵、警察官、協和会職員は特別に調査が行われた。ある日突然、収容所から姿を消してゆく者もあり、一種の恐怖を与えた。

私は、三重の鉄条網に囲まれ、自由も希望も失い、頼れる友に頼る事もできず、政治部将校、民主グループに睨まれ、衰弱はつのである、正に四面楚歌であった。どんよりしているシベリアの冬空のような寂莫とした思いに閉ざされ、沈うつな日が続いた。そんなある日、位牌を出して私の気持ち伝えようとした。この位牌は、公主嶺陸軍病院にいる時、母の訃報に接し、背囊に入るよう小型に作り、両親と姉の戒名を書いていただいた。私はこの位牌を胸に抱いて語りかけた。「戦いに敗

れ、満州におけるソ連軍の暴虐非道を目にし、またシベリア抑留者に対する冷酷無慈悲な酷使により多くの戦友を失った今日、日本に帰りたいために今さらスターリン万歳とは叫べない。だから、このままシベリアの土になることを許して下さい」と語った。帰っても母のいない日本だ。そう決めると心は意外と軽かった。どうせ死ぬのなら、馴れぬ山の作業で死ぬより、心の通った衛生部員に看取られて死にたいと思った。その夜半、私はペチカにびったりと体を寄せて全身に汗が出るのを待ち、汗ばむと零下の屋外に飛び出した。たちまち寒さで身体がふるえる。どうか肺炎になり発熱するようにと念じながら何回か繰り返した。しかし、皮肉にも私は肺炎にもならず発熱もしなかった。こんなに痩せ衰えた身体に、まだ捨て切れぬ生命力が残っていた。私は生きて帰らねばいけないのだ。亡き父や母、姉の霊が守って下さる。こんな所で死んではいけない、頑張らねば、自分で自分の弱い心を叱った。

「コルホーズにて」

やがて三度目の冬を越し、昭和二十三年の短い春が終ろうとするころ、矢野軍医殿に呼ばれ、「金井君はこの収容所については駄目だから、今日、身体の弱い者五十人をコルホーズに出すよう命令が来たので名前を入れといた」と告げられた。軍医殿の温情に感謝した。私の着いたコルホーズは、見渡す限りはるか地平線のかなたまで馬鈴薯畑であった。作業の日本兵は五十人ずつ、四カ所の収容所より集まり、二百人だった。翌日畑に出ると我々は、まだ育ちきれぬ馬鈴薯を掘り出し、土をちよつと拭いただけで生のままかじった。蒙古系の背の低いズングリ型のカンボーイ（歩哨）は、食べては駄目だと日本兵を蹴る。日本兵は広い範圍に散っているので歩哨の方が疲れて諦めた。その後もズングリ歩哨が近くにいる時は蹴られるので注意した。生でかじったのは最初の時だけで、仕事に馴れると、焼いたり蒸したり、餅のように搗いたり工夫し、おいしい食べ方を研究した。一カ

月も経ったころ、若いソ連の所長より全員集合の命があった。初めてのことで何事かと集合した。所長は、医務室を担当しているI軍曹で、治療の際に患者に煙草を要求する、医務室を金井に担当させるよう投書があったので、この場で賛否を問うと言う。私はソ連で表面に立つ仕事は不向きと思っていたので、内心困ったと思っていた。結局I君を支持したのは同年兵の方一人で、他の方は、私のことを知らない方が多いのに全員、私に賛成した。私はソ連の所長に、金井は衛生兵で医者ではないこと、この収容所に衛生下士官が多くいるから、相談制か輪番制にしてほしいと申し入れた。所長は、日本では責任者が二人いるのか、ロシアでは常に一人だ、その方が良い仕事ができる。医者は週に一回、ロシア人の医者を派遣すると言う。私はこの若い所長に好意を待ち信頼して、医務室担当となった。

山の作業隊と異なり、作業も軽く馬鈴薯のお陰で体力も増し、病人は皆無となった。だが約束通

り、ロシア人ドクトルは毎週土曜になると訪れ、お互いに不自由な日本語とロシア語で語り合った。ドクトルがある日、ロシア人收容所に泊りに来いと言う。自分で所長の許可をもらってきてくれた。車にてロシア人收容所に着くと、先ず彼の個室に案内し、私の汚れた外套を脱がし自分の外套を着せ、自分の帽子を幼児に被せるよう形を整えて私の頭にのせてくれた。何と優しいロシア人もいるのだろう。彼のなすまに任せた。次に炊事場に案内し、腹いっぱい食べるように勧めてくれる。私は思いがけぬロシア人の優しさに胸がいっぱいになり、せっかくのご馳走がなかなか咽を通らない。食後、日本流に最敬礼して謝意を表した。次に女性の收容所に案内してくれた。若い女性が多く、煙草を吸いながら痩せた日本兵を見物している。ほとんどがドイツ軍に協力した罪とのことだった。ドクトルもドイツ軍の捕虜となった一人で、日本人捕虜に深い同情を持っていた。三回遊びに行ったが、その都度、身内の者を遇するように温

かく迎えてくれた。満州に侵入してきたあのソ連兵と同国人とは思えなかった。ある夜のこと、日本兵が怖がつっていたズングリ歩哨が来て、部落に患者がいるから一緒に来いと言う。薬箱を持ち、畑道をついて行く。私は夜盲症で夜道は足元が悪く、時々つまずいた。歩哨は不審がり、どうしたと聞くので、夜はよく目が見えない病気だと答えると、誰もいない暗い畑の真ん中で銃を私に持たせ、かがんで背中に乗れと言う。銃と薬箱を持った私を背負い、八百メートルも畑道を歩いて部落に着いた。私は「スパシーボ」と頭を下げ銃を返すと、彼は黙って人の良い笑顔を見せた。彼の額は汗で濡れていた。もし私が逆の立場であつたら、捕虜に銃を渡し背負うことはできなかったであろう。患者は十歳の子供で発熱していた。両親は、日本の薬だと大変喜んでた。帰り道、彼はまた背負うと言う。私は一人でゆっくり帰ると言うのと、頷いて先に帰った。日本兵が怖がつた、あの歩哨にこんな優しい面がある。あの馬鈴薯は国のもの

どの思い、職務に忠実なのだと思った。その夜、いつもは凍るように冷たく感じる満天の星が、特に美しく感じられた。日本からはるか遠い北の空で光っていた。北極星が頭上真上に輝いている。流れ流れて今この北辺に生きている。いつの日帰れるのか問うても答えぬ星に語らいながら、一人夜の細道を歩いた。コルホーズでの馬鈴薯の収穫が終った。ここの所長は我々を人間として扱ひ、捕虜に理解があった。日本側の指導者の志村君も良識あり、失意の同僚をよく励まし、食糧事情も良くて、半年ほどの期間であったがシベリアの抑留者としては恵まれた月日であった。この次は冬が近い、どこの作業大隊に編入されるのか心配であった。

次の収容所は、シベリア鉄道で使う枕木を作る製材工場であった。初めて作業に出た日、見た目より生木は重いと思ひながら作業していると、シベリアでは珍しい、鬚を生やした日本人に「お前、今まで何してた」と問われた。何か注意されるの

かと思ひながら「医務室に勤務してきました」と答えると「明日から医務室に來い」と言う。鬚の日本人は猫屋田軍医殿であった。軍医殿は豪放磊落な一面、優しさが有り、私は大きなよりどころを得た感じで四度目の冬を作業に出ず、無事穏やかに過すことができた。昭和二十四年春、作業人員の大半と共に軍医殿は本隊のラーゲルに移り、私は残務整理の形で五十人の兵と医務室に残った。そのころから歩哨は形ばかりで出入りは自由となり、地元ロシア人との交流が多くなつた。彼らは民族的差別なく、親しみ易く親切であった。日本の農村の純朴さを感じた。抑留者として平穩な恵まれた日が続いたが、心の中は、早く祖国日本に帰りたいとの焦燥感でいっぱいであつた。ロシア人監督や歩哨に尋ねても、東京ダモイの消息はよくとして不明であつた。

八月に入り、待ちに待った帰国命令が届いた。日本字で書いたものは一切所持せぬよう、違反者は逆輸送して奥地のラーゲルに送り返すと厳しい

注意があつた。ラーゲル出発の朝、馴染のロシア人が大勢手を振って見送ってくれた。もう会うこともない人達であつたが、妙に懐かしさがあつた。輸送途中、スターリンに感謝の署名があつた。全員、列を組み署名する。ナホトカでは熱烈な民主グループの歓迎を受けた。この港に来てまで、反動分子の吊るし上げや自己批判があつた。偶然、運悪く港で、以前私を反動視していた民主グループの者に会つた。私は反動の前歴があるので、心の底に不安感がよぎつた。船尾に懐かしい日の丸を掲げた迎えの日本船を見ても、果して乗船できるかとの危惧の念があつた。名前を呼ばれ、タラップを昇り、出発合図のドラが響き渡る。恵山丸の船体が静かにナホトカの岸壁を離れた時、初めて安堵感が涙と共にこみ上げてきた。

この日を待たず今もなお、雪の凍土に眠れる友よ、さようなら、薄れゆくシベリアの大地に向つて合唱した。

後記

シベリアの体験を、少しでも戦争の悲惨さを伝え、再び愚かなあやまちを繰り返すことのないよう、また忘れてならぬ異境万里の果て、朔風凜冽たるシベリア凍土に今も眠れる数多い友への鎮魂の祈りを込めて綴ってみた。大本营よりの「八月十五日以降、敵国勢力圏内に陥りたる者は、俘虜と認めず」との通達により、シベリアに連行された関東軍、六十万の将兵は捕虜と呼ばれず、抑留者という労わりある言葉で呼ばれたが、実態は捕虜であり、戦時奴隷のごとき扱いを受けた。戦陣訓に「生きて虜囚の辱しめを受けず、死して罪禍の汚名を残すなかれ」と戒められておるように、日本人は捕虜という言葉に、死よりも強い屈辱を感じ、この上もなき不名誉なこととした。

近代戦における日本の捕虜を戦史に拾うと、日露戦争には、ロシア軍の捕虜七万八千八百二十人が日本の二十九カ所の収容所に収容され、明治三十九年、全員が送還されている。

日本軍の捕虜は、佐官二人を含む千七百十八人

が、レニングラード南方百キロ、メドベーンという寒村に収容され、内二十三人が死亡、今も墓標が残っているという。帰国した兵は悲しい運命に生き、狂人の真似をして、一生を狂人として終った兵もいた。当時の捕虜の生活記録は一切残っていない。

ノモンハン事件の時は、帰国後の惨めな運命と家族への迷惑を恐れ、祖国のために戦いながら帰国を断念、ソ連に永住した者千人に及び、送還された百九十二人の将兵の内、将校は自決を強要され、兵は激戦地に転用された。この度のシベリア抑留者の場合は、数多くの抑留記録が発行されており、地獄の生活が克明に報告されている。その体験する苦難の度合いは、ロシア人収容所長が勝者としておごり、冷酷無慈悲、人間性なき人物であったり、日本人隊長が同朋愛なく、自己保身のみを図り、人格欠如している人物であったりした場合、日本将兵の悲惨さはその極に達した。ロシア側が真相に関し誠実なる発表をせぬ限り永久に

真実は不明であるが、六十万の抑留者の内、死亡者は六万三千とも七万以上ともいわれ、その死亡率は、日露戦争の犠牲者を上回るものである。

「異国の丘」の歌詞に「今日も暮れゆく異国の丘に、友よつらかろ、せつなかる」と歌っている。

この「友よつらかろ、せつなかる」の短い語句の中に、万斛ばんこくの涙を呑み、シベリアの凍土に朽ち果てた多くの兵士の姿がある。

なにとぞ、帰国の歎びを共にし得なかつた戦友の皆様、天界みょうじよりの冥護を受け、安らかに眠り下さんことを。

合掌